

GA327

## 国際社会演習－朝鮮半島と日本－

高柳 俊男

配当年次／単位：3～4年／4単位

旧科目名：

旧科目との重複履修：

毎年・隔年：毎年開講 | 開講セメスター：春・秋

人数制限・選抜・抽選：選抜

他学部への公開：×

## 【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

2015年は、戦後70年、すなわち日本の朝鮮植民地支配の終焉から70年であると同時に、日本と韓国が過去を清算し、国交を樹立してから50周年に当たる、まさに節目の年であった。

現在、隣国の韓国に向けて日本の視線には、K-POPをはじめ韓流による関心や憧れがある一方で、領土問題や歴史問題をめぐって軋轢や厳しい見方もある。もう一つの北朝鮮には、かつては熱い視線が注がれた時代もあったが、いまだ国交がなく、冷やかな眺めが支配的である。

どうしてこのような現状になっているのであろうか？ そこに至るまでの間には、どのような出来事や人々の営みがあったのだろうか？ 状況を少しでも良い方向に動かしていくためには、何が必要なのだろうか？

この授業では、日本と朝鮮半島間の複雑に絡まっている糸を、少しずつ解いていく作業をする。それを踏まえてあるべき未来を考察することをめざしたい。なかでも、現在は埋もれてしまっている貴重な歴史的諸経験や未発の可能性を掘り起こすことに力を注ぎたい。

同時に、朝鮮問題を中心にしながらも、日本の異文化理解や多文化共生・多民族共生全般という、より広い文脈の中で捉えることを心がける。

私の演習では、理論から出発するようなアプローチは採らない。むしろ受講生たちが具体的な諸事実をとことん突き詰めるなかで、自らの認識を深化させること——いわば個別を極めることを通じて普遍に至るような学び方を身につけることを重視したい。

## 【到達目標】

日本と朝鮮半島が歩んできた歴史と現在、およびその中で営まれた人々の思索と行動の軌跡を、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解し、受け売りではなく、自らの言葉で語れるようにすることを目標とする。

## 【授業の進め方と方法】

第1回目に、参加ゼミ生個々人がこれまで読んで感銘を受けた韓国・朝鮮関連の本で、ぜひ他のメンバーと議論したい作品を挙げてもらう。それらをリスト化し、個々人の読書の参考にするとともに、一部を年間スケジュールの中にも組み込みたい。

第2回目以降は、まずウォーミングアップから始め、高柳が執筆したいいくつかの関連文献を、導入教材として読む。

続いて今年度のテキストに入る。これは、朝鮮植民地時代に書かれた文章ないし朝鮮植民地時代について戦後書かれた文章の中から、編者が「ベストエッセイ」と考える作品を収録したアンソロジーである。各自には、ウォーミングアップの時期にテキスト全体に目を通し、自分が取り上げたい作者と作品を選定してもらい、それに基づきテキストから春学期と秋学期に1回ずつ報告してもらう。

もちろん、この選定はあくまで編者の鄭大均によるものにすぎない。受講者には、「自分が同様の本を編むとしたらどんな作品を入れるか？」を常に念頭に置き、実際に学年末には「自分が考えるベストエッセイ」（エッセイに限らなくてもいい）一篇とその理由を発表してもらう。

毎回の討論の中で出た疑問点・不足点を、レポーターに次回冒頭で補足してもらい、知識・認識の深化をはかる。

関連映像の視聴を随時まじえ、夏季休業期間などを利用した合宿や関連スポットへのフィールドワークも、受講生の自発性と創意工夫に基づき適宜実施したい。

朝鮮語ができる人には、関連する朝鮮語文献を活用していただくが、朝鮮語能力はこの演習を受講するにあたっての必要条件ではない。

また、授業は登録上では1コマだが、4限と5限にまたがって行なうので、ほかの授業やアルバイトを入れないこと。

## 【授業計画】

## 春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、自分の推薦する本、年間授業スケジュールの確認、導入教材の配付、レファレンスブックの紹介など
第2回	導入教材①	高柳執筆の論文①を読む
第3回	導入教材②	高柳執筆の論文②を読む
第4回	導入教材③	高柳執筆の論文③を読む
第5回	映像上映①	学習内容の映像による確認
第6回	テキスト導入	これからテキストを講読するにあたって、まず編者である鄭大均氏について、他にどんな著作があるか、新聞・雑誌でどんな報道がなされているかについて確認する。
第7回	テキストの個人報告①	レポーター2名の報告と全員による討論
第8回	テキストの個人報告②	レポーター2名の報告と全員による討論
第9回	映像上映②	学習内容の映像による確認
第10回	テキストの個人報告③	レポーター2名の報告と全員による討論
第11回	テキストの個人報告④	レポーター2名の報告と全員による討論
第12回	映像上映③	学習内容の映像による確認
第13回	テキストの個人報告⑤	レポーター2名の報告と全員による討論
第14回	私の推薦する本	年度始めにゼミ生全員が推奨した本の中から1冊を選び、全員で読んでみる。
第15回	春学期のまとめ	ここまでの学習のまとめと、夏季休業中の学習計画の策定を行なう。

## 秋学期

回	テーマ	内容
第1回	秋学期の導入①	夏季休業中の各自の学習成果の報告（一人10分）
第2回	秋学期の導入②	夏季休業中の関連新聞記事の分析（朝日／毎日）
第3回	秋学期の導入③	夏季休業中の関連新聞記事の分析（読売／韓国の新聞）
第4回	映像上映④	学習内容の映像による確認
第5回	テキストの個人報告⑥	レポーター2名の報告と全員による討論
第6回	テキストの個人報告⑦	レポーター2名の報告と全員による討論
第7回	テキストの個人報告⑧	レポーター2名の報告と全員による討論
第8回	映像上映⑤	学習内容の映像による確認
第9回	テキストの個人報告⑨	レポーター2名の報告と全員による討論
第10回	テキストの個人報告⑩	レポーター2名の報告と全員による討論
第11回	映像上映⑥	学習内容の映像による確認
第12回	自ら考えるベストエッセイの発表①	テキストに収録されたもの以外で、各自がベストエッセイと考える文章を探してきて発表する。
第13回	自ら考えるベストエッセイの発表②	テキストに収録されたもの以外で、各自がベストエッセイと考える文章を探してきて発表する。
第14回	自ら考えるベストエッセイの発表③	テキストに収録されたもの以外で、各自がベストエッセイと考える文章を探してきて発表する。
第15回	年間の学習のまとめ	1年間の学習のまとめと春季休業中の学習計画、次年度への橋渡し

### 【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で紹介する各種参考文献の講読、関連スポットへの訪問、学内外における関連イベントへの参加など。とくに、編者による他の著作にも目を通せば、このテキストの性格や位置づけがより鮮明になるはずである。

また、別の科目になるが、自らの大学時代の学びの集大成として、4年次秋学期に「卒業研究」を提出して卒業できるよう、日頃から作成に向けた準備を念頭に置きながら演習にも臨むことが望ましい。

なお、日本近現代史・東アジア近現代史の大きな流れについて、高校で習う程度の基礎知識を前提にするので、不足を感じる人は自分で補うよう努めること。

### 【テキスト（教科書）】

鄭大均編『日韓併合期ベストエッセイ集』（ちくま文庫、2015年）

### 【参考書】

レファレンスブックとして、『朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、『在日コリアン辞典』（明石書店）などを随時参照すること。韓国・朝鮮について深く考えたいと願う人は、自分で購入し、ゼミに持参することを強く推奨する。

「自分が考えるベストエッセイ」を選定するにあたっては、高柳が関わったものとしては、館野哲編『韓国・朝鮮と向き合った36人の日本人』、同『36人の日本人：韓国・朝鮮へのまなざし』、琴秉洞・高柳俊男編『朝鮮人の日本人観・総解説』などを、それ以外ではたとえば、古典的な旗田巍『日本人の朝鮮観』や朴春日『近代日本文学における朝鮮像』をはじめ、高崎隆治『文学のなかの朝鮮人像』、渡邊一民『「他者」としての朝鮮：文学的考察』、小川圭治・池明観編『日韓キリスト教関係史資料』、李修京編『韓国と日本の交流の記憶：日韓の未来を共に築くために』、琴秉洞『日本人の朝鮮観』『朝鮮人の日本観』、朴裕河『引揚げ文学論序説：新たなポストコロナルへ』などを、文献目録としては園部裕之編『近代日本人の朝鮮認識に関する研究文献目録』などを参照するとよい。

### 【成績評価の方法と基準】

演習なので、担当するレポーターはもちろん、それ以外のゼミ生も毎回事前にテキストを読み込み、ポイントを把握して来たうえで出席し、必ず何かしら自分なりの見解を表明することが大切である。そうした平常時の貢献度と発表時の報告内容を35%ずつ、各学期末のレポートを30%として判断する。

### 【学生の意見等からの気づき】

ゼミはサークルや「仲良しクラブ」ではないが、かといって参加者個人の孤独な作業とも異なる。探究心に溢れた一人一人の営みの上に、みなで切磋琢磨できるような場となるよう、ともに努力していきたい。

### 【その他の重要事項】

年間を通して、「知の蓄積」という課題を常に考えながら学んでいきたい。

その意味は、一つはこれまでの歴史の中で蓄積されてきた人類の膨大な知をどう活用できるかという課題、もう一つは自分の中に知をどう蓄積していけるかという課題を指している。

とくに後者については、一度学んだ内容が再度登場した場合、より高いレベルで考えられるようにするためにはどうしたらよいかを、常に念頭において取り組んでほしい。すなわち、漫然とした受け身の学びではなく、真に能動的な学びとはどうあるべきかという問いかけである。

そのためには、具体的にこだわること、すなわち演習内で登場する人名や事件名などの固有名詞を疎かにしない学びが決定的に重要だと考える。